第７回　和歌山県弥生・古墳時代研究会の報告

開催日時：平成 24 年 11 月 24 日（土）10:00～12:00
開催場所：和歌山県立紀伊風土記の丘（和歌山市岩橋 1411 番地）

研究会の発表内容　：

「岡村遺跡の鋸歯文・綾杉文が施された弥生土器」仲原知之（紀伊風土記の丘）

岡村遺跡において 1988・89 年度の発掘調査で弥生時代中期の溝から珍しい文様が描かれた弥生土器が出土しています。全面に鋸歯文や綾杉文が描かれ、県内では類例がないもので、発掘当時はよくわからない謎の土器とされていました。胎土には結晶片岩の粒が含まれ、紀北地域で製作されたと考えられますが、県内に類例がない鋸歯文・綾杉文を全面に描いている点で、瀬戸内地域（岡山県・兵庫県西部）の影響を受けて和歌山で製作されたと考えています。器種は、報告書の図面とは天地が逆で、断面の厚みがある方が下で、この下に脚台が取り付く鉢あるいは無頸壺が想定できます。天地は、内面の黒斑が付いている方が下、また、鋸歯文の斜線が入った方が下、という可能性が高いことからもその蓋然性は高いと思われます。銅鐸にある文様なので、和歌山も含めて銅鐸がある地域では生み出されることができる文様だという見解もできますが、現段階では瀬戸内地域の弥生人が和歌山にやってきて、そこで故郷で作っていたものと同じように製作した土器、あるいは瀬戸内地域から文様が描かれた土器が運びこまれて、その土器を見た和歌山の人が真似をして製作した土器、と推定しています。

「鷹島遺跡の製塩土器の検討」冨加見泰彦（紀伊風土記の丘）

和歌山県有田郡広川町の「鷹島」では、鷹島式の標式となった縄文土器が出土することで知られる鷹島遺跡があります。この遺跡では、あまり取り上げられることはありませんが、縄文時代の他に、弥生時代～奈良時代の遺物が出土しています。特に古墳時代前期～奈良時代までの製塩土器が多数出土し、長期間ずっと塩作りをしていた島であります。この他、石室などは不明ですが、内行花文鏡・勾玉・管玉が出土しています。

参加者　：（敬称略）＜発表者２名＋１０名　計１２名＞
＜発表者＞冨加見泰彦、仲原知之（紀伊風土記の丘）
＜参加者＞中村貞史（元紀伊風土記の丘館長）
（以下風土記の丘ボランティア）金森昌子、工藤哲朗、二河田喜美子、芝　貴子、鳥居千純、川本幸男、島　弘毅、生田　聡、津田明子

【参加者のコメント・質疑応答】

＜岡村遺跡の鋸歯文・綾杉文が施された弥生土器＞

中村　：県内では見たことがない土器だが、器形はどのようになりますか。銅鐸形土製品の可能性はないですか。

仲原　：文様的に銅鐸形土製品を考えることもできなくありませんが、破片の大きさが現状で10cmを超えることから、このような大形の銅鐸形土製品が全国で類例がないので、銅鐸形土製品の可能性は考えなくてもいいと思います。大きさ的には普通の土器であろうと思います。器形は、断面の厚みがある方が下と考えて、その部分から脚台が付くのだろうと考えています。はじめ文様構成などから、弥生時代後期の瀬戸内地域の器台や特殊器台かな、と思って調べていましたが、どうやら吉備地域の器台などではなさそうだと。器形も器台ではなさそうで、兵庫県の篠宮さんに見てもらったところ、播磨地域の脚付きの無頸壺ではないかという指摘をもらっています。

二河田：この他にこの土器の破片は出土していますか。

仲原　：残念ながら、同一個体と思われる破片は出土していません。したがって、全体の器形がどのようになるのか、また文様が全体でどのようになっているのか、少しわからない部分が多いです。

＜鷹島遺跡の製塩土器の検討＞

中村　：発掘に参加した者として少し補足しておきます。発掘調査の発端は、明恵上人の遺跡を確認しようということで１次調査がおこなわれました。私が調査に参加したのは、２次調査からです。佐原真さんに勧められて、縄文土器を中心に報告書を書かせていただきました。製塩土器の層は焼け固まった層で、製塩土器が多量に入っているのですが、非常に土が固くて土器を取り上げるのが困難な状態でした。製塩土器の層は少し傾斜した所に多かった印象です。地ノ島遺跡でも同様に焼け固まった層に製塩土器が多量に入っています。

冨加見：１次調査では円形の焼土層があり、住居の可能性がある遺構がありますが、住居とお考えでしょうか。地ノ島でも同様の遺構があるのですが。

中村　：私は２次調査からなので、その遺構についてはわかりません。

冨加見：紀伊風土記の丘では故巽三郎氏から寄贈された鷹島遺跡の遺物を所蔵しています。この他に、広川町は多数の製塩土器を所有しています。ただ粉々になった破片が大半でした。整理のために形がわかるものを持っていって、その他の破片は地元に置いていった可能性もあります。

仲原　：鷹島遺跡の製塩土器の時期をもう少し詳しく教えてください。

冨加見：鷹島の製塩土器は、弥生時代のものはなくて、古墳時代前期、３世紀前半から確認できます。庄内式併行期に備讃瀬戸地域から製塩が和歌山に伝わったのではないかと考えています。庄内式併行期までは集落の外にはほとんど出ませんが、布留式併行期になると集落の外の消費地でも製塩土器が出土するようになります。古墳時代前期の製塩土器は、通常の土器に見られるタタキ調整が残っており、専門工人による製作ではなくて、一般の人たちによって作られたと思います。布留式併行期までは地面に穴を掘った地床炉でしたが、５世紀以降は石敷き炉になっていきます。和歌山的な製塩土器も作られるようになります。その後、一番新しい形態は砲弾形をしたもので、奈良時代、８世紀まで継続して製塩土器が出土します。地ノ島遺跡も同様であると思われます。あと、鷹島遺跡からは平安時代の緑釉が出土しています。

仲原　：製塩土器がなくなった後は何で塩を作っていたのですか。

冨加見：鉄鍋を使うようになるのでしょう。錆びてしまうので、遺跡から出土することはほとんどないですが。

川本　：鷹島は陸続きだったことはありますか。ずっと島であったなら、離島で塩作りをする意味はなんだったのでしょうか。

冨加見：塩作りは開放された浜ですることは少なく、管理しやすい場所でおこなうものであったことが考えられます。塩の専売のはしりではないでしょうか。

中村　：鷹島での塩作りは季節的なものか、１年中行っていたか、どちらと思われますか。

冨加見：季節的におこなっていたものと考えています。あとの時期は漁業をおこなっていたのではないでしょうか。

工藤　：塩を作る時、濃度をあげるのは天日干しをしたのでしょうか。

冨加見：塩作りに欠かせないのは、海水が近くにあることと、燃料が豊富にあることです。海水は豊富にありますが、燃料にはかぎりがあります。海水から製塩をはじめると燃料がたくさん必要になってきます。そこで通常海水の塩分濃度は３～４％ですが、12％くらいまで濃度をあげておきます。その時に天日干しではなくて、藻塩といってアマモやホンダワラといった海草に海水をかけて濃度を高めることをします。

工藤　：製塩で使用する石敷き炉ですが、掘りくぼめて造っているのですか。

冨加見：あまり遺構の検出状況でははっきりしませんが、少し掘りくぼめて周囲に土手を造っています。１つの石敷き炉では、約70個の製塩土器が置けます。製塩土器１個につき、200ｇの塩がとれるとすると、１回で集落内でまかなう以上の塩が作れます。おそらく物々交換をしていた

のでしょう。

二河田：説明の中で和歌山県では木簡に塩がよく登場し、その中で三斗が多いということでしたが、三斗とはどれくらいの量ですか。

中村　：今なら45kgです。

冨加見：調塩木簡といって、海部郡の加太・黒江や有田郡などからの木簡が多く確認されています。

中村　：和歌山県では古墳の主体部から製塩土器が出土することがよくありますが、どういった意味があるとお考えですか。

冨加見：製塩土器が出土する古墳は、和歌山市の西庄遺跡の他は、日高郡のあたりに多く見られます。製塩土器が副葬品そのものではなくて、塩を供える、または清める意味があったと思います。よく言われます塩作りの長の墓ではないと思っています。

二河田：和歌山県ではタコツボが見られないように思いますが、タコツボはありますか。タコを食べてなかったのでしょうか。

冨加見：大阪の南の泉州地域や淡路島ではタコツボはよく出ていますが、和歌山ではほとんど出ません。ただ、和歌山市の関戸遺跡から２点、あと太田・黒田遺跡、橋本市の市脇遺跡から出土しています。海南市の岡村遺跡からは須恵質のものが出土しています。岩出市の吉田遺跡からは古墳時代のマダコツボが出ています。